

—作品についていろいろ、something as if we doについてもちょっとだけ、

(注) これは作品の解説とは違うので、あんまり期待しないで下さいね。

展示2日目があわただしく過ぎていき、お客さんのおもしろいコメントなどもいろいろと聴くことができ、新たな発見もありました。そんなエピソードをちょっとご紹介します。

6月号の「美術手帖」というメジャー雑誌で、今回の参加アーティストの今井俊介さんが紹介されていました。わかりますか？茶色と青みがかったグリーンような色彩の、表面がつやつやした小さな作品の作者です。おしゃれな壁紙のような感じのあの絵です。カフェ・パルルの中では、ずっと上の方に飾ってあったので、いまいち何が描かれているのかよくわかりませんでした。なんでも彼は海外サイトのポルノ画像を題材にしてきわどい人物像を描きながら、そこへ草花を装飾的に重ねたり、色を変化させたりして一つの画面を構成しているそうです。美術手帖で紹介されていた作品について、今井さんは「ヘルメットやバイクのタンクのカスタムペイント、あるいは蒔絵が施された漆器のようなものを、絵画の範疇で制作してみようと試みた作品です。ぎりぎりのところで絵画の体裁を保っているものに挑戦したいと考えた*」と語っていました。ん～興味深いですね。ポルノと草花。ポルノは当然ポルノでなくなり、そこに描かれたイメージからはかなり距離ができますね。絵画への挑戦。複数のイメーを操作することによるイメージへの挑戦を見ることができます。今井さんの作品は今回のものも含め、ちょっと変わった形のパネルに描かれており、手にとって眺めたくなるような形をしていますね。茶道具とか昔の高級な小箱や香合を連想させます。ところでポルノって・・・今回の作品もそんな感じなのかな？パルルにあった頃、ちょっぴりワクワクしながら背伸びして目をこらしてみました。が、やはり高すぎて見えず。あ～あそこにはいったい何が？

搬入してからオープン1日目、ようやくそれらしき何かが見えてきたような。いよっし！

(*『美術手帖』2007年6月号, vol.59, No.895, 美術出版社, p169-172)

もうひとつショッキングなことが。森だって！ウソ！抽象画じゃないの～？後輩のkabaちゃんはしっかり森と見抜いていました。もしかしてお客さんみんなもうとっくに？この辺りが根っこでこう枝が・・・解説してくれるkabaちゃん。言われてみると何となく森かな？って思えてきます。近寄って見るけれど、その光沢を放った顔料の中に、ますます埋もれて、いや溶けて行く感じです。森なのか～ふーん。で、気が付けば6時過ぎ！慌てて片付けて電気を消したその瞬間、目の前に森が！白色に輝く森が見えたのです。近寄りすぎてはダメなのです。木を見て森が見えなくなってしまいます。しかし暗闇で光を放つ絵画とは、またしゃれている。

ん～・・・で、kabaちゃんはどの絵が好き？え？鳥の絵？さっすがkabaちゃん、ナイスセンスです。だって鳥のような、人のような・・・ですよ。しかも彼(?)、かっこいいですね。羽毛のようなそのマント、一面グレーが広がる中で、あんな堂々と！ベラスケスの描く道化師にも、マネの描く笛吹き少年にも劣らない、その貫禄！でもなぜ彼は鳥なのでしょう？

山本高之さんと言えば！そう！スプーン曲げの彼です。小学校のみんなと一緒にスプーン曲げしてた人ですね。あれはマジックなのか、超能力なのか、知り合いに本気で訊ねたら本気でひかれました。今回の作品もとても楽しそうですね。

左から3番目です。星野武彦さんの作品。彼女は何者？何か出てるし・・・スタイルいいし！青空だし・・・彼女の秘密は、そう、トークの時に星野さんに聴いてみましょう。「さようなら」の訳も一緒に。

初日に来てくれたお友達のmayuちゃんは、おもてなしclubのメンバーです。彼女の選んだ作品は、Are You Meaning Companyさんからの「Swimming pool & garden project」。フランスから届いた芝生のお庭と水色のプール。ちょっとうれしくないですか？mayuちゃんのおもてなしとしてのアート。Are You Meaning Companyさんは子どもたちと一緒に美術館に街をつくるワークショップを行ったり、いろんな活動をしています*。その活動は、日常生活のささやかなひとこまに着目し、より快適で楽しい生活を送るように働きかけていくというものです。どんなおもてなしができるだろうって考えたときに、アートって

いいなって思いませんか？そうそう、Are You Meaning Companyさんは今回のsomething as if we do展の企画者の一人です。今回の展示、もともと新栄のカフェ・バルルで行われていたっていうのはご存知ですか？そこは夜遅くまで営業しており、ソファに座ってゆっくりゆったり過ごせるとても素敵なカフェです。そんな場所で作品を展示するのって、とても素敵なおもてなしじゃあないですか！

(*Are You Meaning Companyのワークショップ「ぼくらのまち」, ビュフェ美術館, 2007年3月)

次は映像作品です。木漏れ日の中に音もなく消えていく蜂の死骸。最後には黄色のしみだけが残る不思議な作品。どうなってるの？田幡浩一さんに直接聞いてみました。なんとっ、ペンのインクが無くなるまで、同じ位置に同じ蜂を何百枚も描いたという。それを一コマコマ、アニメーションでつなげたそうです。消しゴムで消したわけじゃないんですね。彼はほかにも、動かないアニメというものをつくっていて、それもまた何百枚も描いたものをつなげたそうです。田幡さんの今回の作品は、美しく、ちょっとはかない感じがします。その背景には、物事が実際にはどう成り立っているのか、という認識に関わる問題が含まれていたのですね。

ギャラリーに入ってすぐ右の作品、磯邊一郎さんの作品は、色鉛筆で描かれた不思議なイメージ。ある人には遺伝子のように見え、またある人にはジェリービーンズのように見えました。流動的でミクロな世界。ゆるやかに集まったかと思うと、再び散らばっていく。彼の作品は、イメージの成立と解体の危ういライン上を行ったり来たり、浮遊している感じですね。何だか楽しげに見えるのはどうしてなのでしょう。

ほかにもまだまだ気になる作品、よく見てみたい作品がいっぱいあります！岡川卓詩さんの、あの飛んでる物体が何か気になるし。本当にいろいろ、いろいろ気になるところがいっぱいあります。なんといっても19作品もあるのですから。平面という一つの枠の中で、こんなにいろいろなアートがあるっていうこと。それって世界にはいろいろな見方・考え方があり、アートに限らずいろいろな表現ができるってことでもありますよね。アートも人の生き方も、きっとまだまだたくさん可能性があると思います。そう、かなりポジティブです。

もう最後です。ここまでは、「いろいろ」ということを言ってきました。じゃあ逆に、このsomething as if we do展の全体はどうなのでしょう？まずこのタイトルが気になります。とてもゆるやかな印象のこのタイトルからは、「するよな・・・」、「しないよな？」あいまいな雰囲気伝わってきますね。勢い込んで何かやるっていうわけでもなく、やり遂げようっていう熱い意気込みとも違います。では何か？ゆるやかに動き出したけれど、まだ目には見えない。気付かれない。そのささやかな行動に、どれほどの意味があるのかも、まだはっきりとはわからない。そんなささやかなアクションを起こしてみる。するとちょっとずつそれに反応してくれる人が出てきて、そこでまたアートなりコミュニケーションなり、あるいはおもてなしなり、次のアクションが起こりそうじゃないですか。ゆるやかに、ちょっとずつ、けれど確実に、誰かの心に何かを残していく。アートには、衝撃や印象ということも必要ですが、即効性ではない、そんなゆるやかな力もあると思います。

そう考えると、アートと教養って似てますよね。「教養」って言うてしまうと一気に固いイメージになってしましますが。それともアートは教養の一つなのでしょう？とにかくそれは一夜漬けで得られるものではなく、かといって知識を身につけるだけでもなく、日常見聞きするものを通じて、いわば自分の身体すべてを通じて、ちょっとずつ育んでいくものでしょう。

カフェから大学へ。something as if we doが、ここ名大の学生や職員の皆さん、もちろん学外から来て下さる方もですが、皆さんと出会い、皆さんがsomething as if we doと出会うことで、それぞれにどんなアクションが生まれ出てくるのか、まだ見えないけれど、きっと素敵なことにつながると信じたいです！ポジティブですから。何となくでも、ちょっとずつでも、まずはやってみなくちゃね！